

〈随想〉

なれ

村田 修子

“なれ(ず) ・ なれ(たり) ・ なれる
なれる(とき) ・ なれれ(ば) ・ なれ(よ)”

私は原稿を書くことに余りなれていないからかも知れないが、何か書くときはとてもその書き出しにこだわ
る。そこがうまくいくと案外すらりといくのだが、それ
だけにこれを考えているときが案外長い。自分でも“余
りこだわらないでもいいのに…”と思いつながらこだわ
る。これもなればなんでもなくなるのかも……。

「なれる」ということはいろいろな面で子どもとも関
係あることなので、なれる、なれる……といっているう
ちに、生徒の頃習った活用形を思い出した。たしかに
色々な状況がこの中に全部含まれているのだ。なるほ
ど、(当たり前のこと……)

また「馴れる」「慣れる」と漢字を考えてみる。

○きつと馬は水を好まないが、ときがたつてなれてくると川にもこわがらずに入るようになるのかしら、と思ったり、

○習慣のようにいつも経験しているとできるようになる、ということなのかしら、

等と勝手な意味あいを考えてみた。そこで辞書をひいてみる。

馴れる（親しみなつく。珍しくなくなる。）

慣れる（習慣になる。習熟する。）

とあったのでまんざら見当違いでもなかった。と自己満足し、そこから思いはどんどん広がって、「それにしても今の学生さんは、気にして辞引きでたしかめることはしないだろうな」と思いながら、いつも提出される実習の記録の中に、直さずにはいられない誤字、感心してしまふような当て字を思い出した。私の覚えていた字に不安を感じて辞書を手をさせられて、にが笑うることの多い昨今なのである。文章を書くことに一生懸命で余り考えずに「慣れた字」を書いてしまいうらしい。

さて、今年も幼稚園界の話題の焦点は、「新教育要領」に関することだと思ふ。

「教育要領」は一番土台になることなので、それが改訂されたというときだから当然なこととは思ふ。今私が経験した三回の改訂を振り返ってみれば、それぞれ違った感触であった。

先ず、昭和二十二年に「保育要領」が出されたときは、私は全然何も知らずに幼児教育の世界に入ったばかりのときであった。それ迄は余り関心はなく、いとこ達が幼稚園に行っていたのを見にいった感じとか、どういうことをした、という話から、私なりに「幼稚園とはこういうところらしい」と思っただけだ。

印象としては

○学校のように何でもきちんとならんと同じようにやる。

○先生の言う通りに子どもがやっている。

○壁に同じ作品がぎっしりと貼られている。

幼稚園の経験を持たない私は、これ以外の姿というものは考えたことも無かった。でもさすがにみんなで机に向かって恩物をしている姿は見たことはなかったが、織紙などの製作物を古い箱の中から見つけたことがあるので、半世紀ほど前はこういう内容が専らであったのだろうと思った。

それが第二次世界大戦のあと、アメリカのGHQの指導で出された保育内容は御存知のように十二項目

1. 見学
2. リズム
3. 休息
4. 自由遊び
5. 音楽
6. お話
7. 絵画
8. 製作
9. 自然観察
10. ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居
11. 健康保育
12. 年中行事

勿論我が国の保育も、これ等のことどもは考えてやられていることは分かるのだが、これを見て私は「日本の幼児教育が普通の生活の中に入ってきて、身近なものになったし、小手先でやられていた姿から新しい感覚の、いなれば、はいからで明るい感じになった。」と思っ

た。

余りに中味ずばりの表現に、先生たちはめんくらったようではあるが、すらすらと理解されたような気がする。

そしてそのときの先生方は、全くすなおに、その変わり様についてゆくべく目を丸くし話を聞き、目を大きくして話し合いをし、次には目を輝やかして前進し、徐々に子どもの中におろしていった。

本当にそれでよかった、という感じであった。何故なら指導の立場にあったアメリカのその人達の口からは「先ず子どものために」子どもが好きなことを先ず第一に考える……、それが幼児の教育である」ということをことばではっきりと言われたからである。子どもの幸福のために、ということが一番基本になっているのだ、という日本の教育界では余り気軽に聞くことが少なかったことを耳にして、新任の私にもよく分かったし、新鮮に映ったのはたしかである。

先生達も安定感を持ったようであったし、それにつれて子ども達の活動する姿も以前とは違って大きくのびの

びとしてきた。よそゆきではない本来の子どもの姿を見聞きするようになってきた。それに依り私も子どものことを色々な角度から考えることが必要なのだ、ということが分かってきた。

このときの改訂は、「保育内容」の変わりようが一番印象にあるのだが、次の昭和三十一年（試案）・昭和三十九年の改訂のときは、前の保育内容の考え方になれてしまっていた人達は、六つの領域にまとめられたことに戸惑いをかくせなかった。「この活動は一体どこに属するのだろうか？」等々、割合いに意味を持たないことが論議されることが多い状況であったように思う。

私は二回とも幸いなことにそれに深くかわられた倉橋惣三先生、坂元彦太郎先生がそばに居て下さって、直接そのまっすぐなお話を聞かせて頂くことが出来た。遊びに「伝言ゲーム」というのがあるが、人から人へと伝わっていく間に、聞いた人の経験や思い等が加えられて思いがけない方向にいつてしまうことを遊びの要素としているが、改訂時も全くその通りで、伝えられていくに

つれて驚く程真意から離れていつてしまう。見当違いもはなはだしいことがやられてびっくりさせられることも多かった。

その時に持たれた説明の会などでの話を素直に聞けば、本意は受け取れるのではないか、と思つたものであつたが、単純な私などは全く驚くような解釈が出たりして、火花を散らすような論争もよく耳にした。

だから二十二年の改訂のときには殊更に思わなかつた「静かでいて張りつめた空気」をあとになつて思い起こした。考えてみるとこのときは幼稚園界だけではなく、総てのことが前と違つた新しいひとに切りかわつたときだから、論じ合つたりする余裕もなくなつたのには違いないし、後者は、今迄の安定した「なれ」の状況をはなしたくないという新しいものに対する人間本来の反応もあるかも知れない。

そういう経緯をへて、今私にとっては三度目の教育要領の改訂を経験した。

これもお茶の水女子大学の学長でいらつしやる河野重

男先生が中心になって事を運んで下さったので、お目に掛ったときに「基本的には倉橋先生の理論をもとに……」とお話し下さったことはとても有難いことであつたし、改めて幸せに感じたことである。

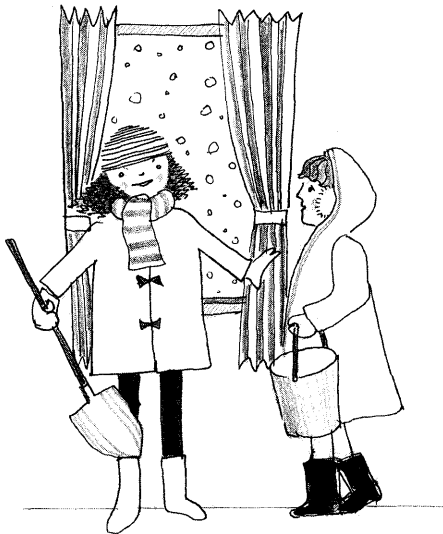
けれども今回もまたまた、幼稚園の現場ではむずかしく考えて混乱が起こっているようである。

世の中では五日制が論議され、既に実施されている会社等も多い。『だから（そこからがおもしろい）今度は五領域になったのだ、……。』というに至っては「ナンノー？」というほかはない。一日に一領域ずつやろう、とでもいうのか、そこにはひとつも子どもが存在していない話である。

昭和二十二年の頃、「子どものことが先ず第一で、子どもが幸せに……」というのを聞いて私がやっと分かった、という時代とは違って、福祉の関係やその他の事でも今は「子どもの幸せを目指して……」という種類のことはよく耳にする時代である。それが子どもに関係する仕事をしている者が、子どもを不在にしておいて、園

のやり方のことを考えても何の意味もないのに、と思う。

また毎日の保育にしても、「子どもがやるのを見ていればよい」ということで、先生はただ立って見ている様



子が変わってきている、というのである。子どもがやっていることに手を出したり口をはさんだりして指導はしないのだという。指導してはいけないのだ、ということも耳にした。それなら先生の養成校など必要ではなくなる。子育ての経験のあるおぼさんで十二分に事足りてしまふ。

「指導」というのは幼児にとつては一寸固くてそぐわない感じがするので、使いたくない人は使わなくてもよいけれども、様々なことを経験させるとそれは本物として身につく、ということからすると、経験の少ない子どもに経験の多い大人が真剣に相手になって上げて、よりよい方向にむかわせる、これは絶対に必要なことである。字句にこだわらないことも大切である。

また、「自由保育」はよくて、「一斉保育」はだめ、というらしい。ここで「自由保育」というのはどういうことなのか、と改めて問われると多分誰もが答えに困ると思う。倉橋惣三先生がこの言い出し人のように思っている人も多いようだが、先生は一度もそういうことをおっ

しゃったことはないし、書かれたものの中にも「自由保育」ということは無い。「子どもの自由な活動を尊重する保育」という意味のことをおっしゃってはいられないが、それが今よくやられる言葉の省略のようにひつつめられて「自由保育」となり、それぞれの解釈の仕方によって使われているのである。だから定義というものはつきりとしていないが、これがあたかも倉橋先生の理論を代表するかのようにならされているのは、それを知っている者達としては、誠に遺憾なことなのである。

ここでも子ども不在の考えである。子どもが自分で考え、すずんで精いっぱい活動するならば、子どもはちばん幸せで且つ有意義な過ごし方なのである。そのためにはどういふ形の導き方がよいのか、ということでは

○ひとりひとりとかがわる

○グループでかがわる

○みんなで共通の経験が持てるようにかかわる。

そのやりたいことよって、これ等のかかわり方が打ち出されてくるのであって、保育のやり方が先行するの

ではないのだが、とかく形の方が優先して考えられることが多いのが現実であるから、「一斉保育」はだめで、「自由保育」は何をしてよいか分からないけれど、子どもがやるのにまかせるその保育がよい、ということになってしまう。

或る会合で、「自由保育」だの、「一斉保育」ということを使わないで、なんとかしてこれをなくしたい、と思っている先生のお話を聞いたことがあるが、全く同感である。この頃では、入園希望の親が参観にきたときに「こちらは自由保育をしていらっしやると聞いていますか……」とくる。その人が「自由保育」というのをどのように理解しているのか分からなくては話のもっていきようもないので、意地悪をするつもりはないが、それはどういふことなのか聞いてみる。すると多くは「朝きたら子ども達は帰るまでやりたいことをしてそれで帰るのだそうですね。」という返事である。「みんなで楽しく紙芝居をみるときも、みんなで誕生会に参加することもあるのですよ」というと「行事もやるんですか？」と安心

したような顔付きになる人が殆どである。

真意は入園してから分かってもらうように考えることにして、ひとまず話は打ち切るが、よく分からないのに専門的な用語をむやみに使ってくることも多い。

ここでも“なれ”による安易な思考が感じられる。

子どもが入園して、仲々なれない状態にいるのを、いろいろな手段で心持ちをほぐすように計らい、なれてくれば、一人一人の子どもが持っている個性に合うように手だてを考えながらふれ合っていく。そこにはなれた先生の力が何といっても必要なのである。子どもを大事に思い、また教師を信頼する子どもとのふれ合いが何にも増して大切で、お互いになれなければいけない。けれどまた、なれすぎても困る事柄もある。

私は長年混み合う電車にのりつかなかったのに、通う先が変わって、東京でも一番と朝の混雑の電車に乗るようになった。とても奇妙に感じたのは、ぎゅうぎゅう押されて、近くの人達と体がくっついてしまったと

き、鳥肌が立っているのか、くすぐったいような感じを覚えることであった。普通であったら考えられないような、例えばふくらはぎが隣の人の足にくっついたり、呼吸しているのを感じたり、立ったまま居ねむりをする人のガクンという膝のゆるみを味わったりする。自分でも押されている格好を想像してみるとおかしいのだが、どうにも出来ずに耐えつつ目的地で押し出されておる。

そういったビリビリという皮膚での妙な感覚が半年もたった頃消えてしまった。「あつ、こういうことになれてしまったのだ」と思っているが、「なれることの必要さ」と同時に、「なれて感じなくなるこわさ」もあると思っている。

幼稚園で子どもに接するときにも、気にしなければならぬ「なれ」である。

あの下一段活用のどれもが、子どもの姿を思い浮かべさせてくれる。

○もう一か月たったのに○○ちゃんまだなれない。

○○○ちゃんはやっとなの子にもなれてこわがらなく

なって、今日は手をつないで帰ったわ。

○朝きたら先ず手を洗ってうがいをする事になれてきた。

○友達と遊ぶ事になれてくれば園の生活がもっと楽しくなるし、もっといろいろな経験ができるようになる。

○「早くなれない!!」という命令は好ましくないけれど……。

いろいろな場面の姿が思い出せて楽しい。

もっと違うことばを活用させてみて楽しもうと思う。

(洗足学園短期大学・同附属幼稚園)